

Title	国際結婚女性のライフコースに関する考察：日中国際結婚した高学歴女性へのインタビューから
Sub Title	Life courses of women with intermarriages : from an interview of Chinese high-educated women with intermarriages
Author	郭, 笑蕾(Kaku, Shōrai)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.66- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国際結婚女性のライフコースに関する考察  
——日中国際結婚した高学歴女性へのインタビューから——

Life Courses of Women with Intermarriages:  
From an Interview of Chinese High-educated Women with Intermarriages

郭 笑蕾

### 1. 問題意識

近年、国際結婚移住女性の数がますます増加してきている。その中で、高学歴女性は再生産領域の主体だけではなく、日本社会の各領域において重要な労働力として就業している。現代日本の女性と同じように、人生の中で職業生活が占める割合や、職業を通して社会的地位を獲得する機会は増加しているだろう (村上 2000)。しかし、日本社会において女性がおかれている労働環境は、一度結婚・出産によりキャリアを中断してしまうと、以前のようにフルタイムで就労することが難しいものになっている。近代社会において、人々の所属階層は、主に職業上の地位によって決定される。社会的地位の高さと就業の継続は、どちらも女性の社会的達成にとって重要な要因である。どのような仕事に従事するか、結婚・出産後に就労を継続するかどうかは国際結婚した女性にとっては、社会的地位の達成や移住国への適応などにも重要なことであろう。

事実、日本においては、ライフコースが多様化・脱規範化してきたといった主張がしばしばなされてきた (中井 2009; Mayer 2001)。中国においても、改革開放政策以降、人々の意識は大きく変わっており、同時に晩婚化・未婚化も進展している。人々のライフコースも大きく変化している。しかし、日中国際結婚した女性のライフコースはどのような有り様であるかは未だ不明な部分が多く見られる。また、ライフコースがどのような影響を受けて形成していくのかといった問題も手付かずのままである。

そこで、本稿は、日中国際結婚移住した高学歴女性を対象とし、彼女らの職業経歴を究明し、彼女らのライフコースに影響を与える要因を明らかにしたい。

### 2. 先行研究と本稿の位置付け

#### (1) ライフコースの多様化に関する研究

ライフコースは、年齢階層化した社会構造 (ないし社会制度) の中で個人が生涯時間を通じて歩む加齢パターンだと整理される (嶋崎 2008)。ライフコースについての研究は、移行過程のメカニズムを包括的に観察し、説明するものがあり、また、特定の歴史的出来事がライフコース・パターンにどのような影響を及ぼすのかに焦点を当てた研究もある。そして、国家や社会制度のあり方が個人のライフコースに及ぼした影響についての研究や、特定の性質をもつ人々の加齢過程を観察する研究がある (嶋崎 2008)。

郭笑蕾「国際結婚女性のライフコースに関する考察——日中国際結婚した高学歴女性へのインタビューから」

『三田社会学』第 24 号 (2019 年 7 月) 66-82 頁

近年、高学歴化や女性の就業率の上昇といった社会変動と並行して、ライフコースレジームの歴史的変化、すなわち伝統型ライフコースから産業社会型へ、さらに脱産業社会型へとといった社会変動が見られる（中井 2009: 700）。中井（2009）によれば、日本社会においては、高度経済成長期に婚姻や出産などが適齢期化するなど標準的ライフコースが成立し、いわゆる男女の役割分担を前提とした「近代家族」がこの時期に確立した。日本は欧米諸国やアジアの幾つかの国々と比べても、育児期に女性が仕事を中断する傾向がみられる（落合ほか 2007）。80年代以降は、学校から職業への移行に見られる変化、結婚・出産タイミングの遅延、非婚や離婚の増加といった家族をめぐる変化からライフコースが多様化しているという主張がある（中井 2009: 700）。

## （2）ライフコースに影響を与える要因に関する研究

女性のライフコース分化に関する研究は夫の所得階層、夫婦間の所得差、妻の学歴によってこれまで説明されてきた（川口 2002; 平尾 2005）。中村（2010）は、母親の子育て意識や言動は、女性のライフコースに影響を与え、育児優先を勧めるかによって、大卒女性の結婚後のライフコースが分化すると指摘している。しかし、他の女性の結婚後も一貫して就業を継続する者、退職後再就職する者、結婚・出産退職後無職者などのライフコース分化については十分には研究がなされてこなかった。小坂・柏木（2007）は、学歴・教育がライフコース選択の大きな要因になることを示し、その理由として大学卒夫婦の方が高校卒夫婦より夫や夫の親から就労を反対されることが少なく、夫の家事サポートが高いことをあげている。また、「男は仕事、女は家庭」という伝統的性別役割意識も個人のライフコース選択に影響を与えることが知られている（手塚・古屋 2017）。

ライフコースにおいて、家族形成と職業キャリアはそれぞれ重要な領域をなすだけでなく、相互に関連し合っている。エルダーによれば、ライフコースの構造は、社会的移行の継起を産みつつ、生涯時間を通じて相互に絡み合う複数の軌道ないし行路から構成されるととらえられる（Elder, 1992: 1121）。麦山（2016）は無業・管理職への移動を題材に、結婚がキャリアに与える影響を、時間による効果の変化を考慮しつつ、男女を比較しながら検討した結果、女性は結婚の直前から無業への移動が生起しやすくなり、結婚してから時間が経つことで、管理職への移動を妨げる効果が現れ、結婚6年後以降に管理職へと移動しにくくなることを明らかにした。

女性の場合、結婚したり、子供を持つことで賃金が低下するというペナルティが存在する。また、就業中断に伴う人的資本の喪失は、女性が被る賃金ペナルティを説明する重要な要因の一つである（川口 2005）。結婚時に配偶者が自営の職に就いていた場合フルタイムの職を辞する傾向があり、「女性は配偶者が大企業勤務である場合に有意に無職化しやすいということである」（中井 2009: 705）。

中井（2009）は、生涯にわたって個々人が経験する出来事や役割、さらに個人が取り巻く社会的出来事などライフコースの視点から、性別役割分業と結びついたライフコース上の特徴と

職業の側面がジェンダーに基づく職業機会格差にいかに関与しているかを社会階層と社会移動調査データの分析から検討した。ライフコースを通じた職業キャリアの中断/継続が男女でそれぞれいかなる要因に規定されているかを明らかにした。また、男女で賃金格差がある職場での権力・権限を有するポジションへの接近を規定する要因が明らかにされた。そして、性別職業分離や就業の中断、職場経験年数など性別役割分業に結びついた諸要因がいかに関与しているかという視点から検討された。

辺 (2006) は北京在住の 45-59 歳の男女 26 名に対して、インタビュー調査を実施し、対象者の教育キャリア、家族キャリア、職業キャリアなどについて語ってもらった。その結果、新中国の成立に伴う男女平等を目標とする女性解放は、市民主体の解放運動ではなく、国家政策として推し進められた結果、人々が「男女平等」を事実として受け止め、女性の社会進出は著しく進展したことがわかった (辺 2006: 385)。しかし、「男は外、女は内」(蔣 2001) という中国の伝統文化の根底にある規範は、未だに関与を及ぼし続けている。そのため、仕事と家庭の両立困難に遭遇した時、女性たちは自ら進んで家族責任を担うために、職業上の成功の機会を夫に譲る傾向がある。女性自身にも十分に意識されなかった「男は外、女は内」という性別役割分業モデルが、彼女たちのキャリア上に葛藤を生じさせているのである。さらに、「経済改革が進み、職業選択の自由が大きくなるとともに、労働市場での競争が厳しくなると、中年期に初離職を体験する女性は増える。彼女たちは初離職後、家族員の介護や経済的扶養のニーズとの調整を図りながら再就職か引退かを決める」のである (辺 2006: 386)。しかし、中国固有の歴史的時代背景のもとでの女性の職業キャリアやライフコースは異なるため、現代における国境を越えた女性たちはどのようなライフコースに辿っているのか、彼女たちのライフコースはどのような要因に関与されているのかはまだ不明である。

### (3) 国際結婚女性のライフコースと本稿の視座

伊藤 (2008) が、移動した女性たちが移動先で担う活動とは、「家事、子育て、高齢者ケア、看護」などの人間の再生産領域に関わる分野に集中していることを指摘している。特に「国際結婚」のケースは、移住女性が再生産領域の労働に当事者として、直接的に加わっていると言える (大野 2015)。国際結婚移住に関する研究の多くは、再生産領域の主体としての移住女性を対象とするものである。しかし、多くの国際結婚した女性が自らの言語能力や以前の就労経験などの人的資本を生かし、移住先で就労していると指摘されている (武田 2011; 柳 2103; 李 2012)。国際結婚した女性は就労によって、自分のアイデンティティの再構築や家庭外での社会的地位やネットワークを獲得している (大野 2015)。今日において、国際結婚した女性たちは移住先の重要な労働力としてみなされるべきであろう。特に高学歴女性たちは、移住先としては、重要な労働力ではなからうか。国際結婚移住女性を労働力としてみなし、この女性たちの職業キャリアに注目することが重要である。

また、ライフコースの概念はこれまで社会学で多く用いられてきたが、これまでの研究ではライフコースと移動を関連付けて論じる視角が欠けている。すなわち、ライフコースにおける

時間の流れだけでなくライフコースが生起する空間の移動の相違が、いかにライフコースに影響するのかの検討が不足している。女性の国際結婚から始まる新たなライフコースが、二つの国での移動によって、どのように変化や定着を見せるかに関する視点が欠けている。人の移動が活発している今日、二つの国に行ったり来たりするライフスタイルが多くなってきている。そのため、移動する主体についての研究には、トランスナショナルなライフコースの視点を加えることが必要となる。トランスナショナリズムとは、「出身地と移民先にまたがる重層的な社会関係が形成・維持される過程であり、移民は両方の社会を生きる存在とみなされる」（宮島 2015: 39）。上杉は、1990年代以降、国境を越えた多角的帰属意識と多角的ネットワークの存在を強調する概念としてトランスナショナリズムが再定義されたと指摘している（上杉 2004: 13-14）。「1990年代以前の移民研究では、移民は最終的には受け入れ国に同化されるか、さもなければ出身国に半永久的に帰国するものと考えられていた。しかし、1990年代にはいると、移民が移住先国と出身国の間を頻繁に往復し、双方の国に対して帰属意識を持ち、国境を越えた様々な社会的ネットワークを維持し、それを主体的かつ戦略的に駆使することが目立つようになった」（山本 2017: 273）。国際結婚移住におけるトランスナショナリズムは結婚移住の主体のライフコースにどのような影響を与えるのかはまだ不明なことである。

そこで本稿は、日中国際結婚移住した高学歴女性を研究対象とし、インタビュー調査によって彼女らの就業に影響を与える要因を究明する。そしてその結果をもとに、国際結婚移住におけるトランスナショナリズムがどのように女性のライフコースに影響を与えるのかを明らかにしたい。

### 3. 調査概要

本稿で分析するデータは、2018年9月～2018年11月、2019年1月～2019年2月の間に筆者が行ったインタビュー調査の一部である。中国出身の高学歴女性8名に国際結婚移住の経験について語ってもらい、彼女らの職業経歴とライフコースについて調査した。調査協力者は、筆者の知人からその知人の国際結婚女性を紹介してもらいスノーボール・サンプリングによって募った。協力者一人につき1回ずつ、一対一の面接を行った。一回の面接の所要時間は1時間から2時間であった。

インタビュー協力者一覧表

項目	A	B	C	D	E	F	G	H
年齢	31	51	33	41	30	56	43	35
学歴	修士	大卒	修士	修士	大卒	大卒	大卒	修士
夫の学歴	大卒	大卒	修士	大卒	大卒	大卒	大卒	修士
夫の職業	自営業	正社員	正社員	正社員	正社員	正社員 (定年)	正社員	正社員

子供	無	無	無	一人	一人	二人	二人	無
20-22 歳	中国で大卒	中国で大卒	中国で大卒	専門学校卒	中国で大卒	中国で大卒	中国で大卒	中国で大卒
23-24 歳	来日留学	来日就職	来日留学	結婚、出産	来日就職	中国で就職	来日就職	来日留学
25-26 歳	結婚	(正社員)	初職	来日留学	正社員	↓	↓	日本で就職
27-28 歳	初職 (正社員)	↓	(正社員)	大卒	結婚	↓	結婚	正社員
29-30 歳	転職 (バイト)	↓	結婚&退職	日本で就職	出産&退職	↓	継続	↓
31-32 歳		↓	↓	修士修了		結婚、来日	第一子出産	↓
33-34 歳		↓		中国に帰国		第一子出産	第二子出産	結婚
35-36 歳		↓		離婚		第二子出産	バイト	継続
37-38 歳		↓		再婚、来日		再就職	↓	
39-40 歳		結婚		無職		正社員	正社員	
41-42 歳		無職				↓	↓	
43-44 歳		バイト				↓		
45-46 歳		↓				↓		
47-48 歳		↓				↓		
49-50 歳		↓				↓		
51-52 歳						↓		
53-54 歳						契約社員		
55-56 歳						↓		

#### 4. 語りの分析

国立社会保障・人口問題研究所 (2015) では、女性のライフコースを「ひとりの女性が送る人生のタイプ」と定義し、仕事・結婚・育児の組み合わせから、1) 専業主婦コース (結婚し子供を持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない)、2) 両立コース (結婚し子供を持つが、仕事も一生続ける)、3) 再就職コース (結婚し子供を持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ)、4) DINKSコース (結婚し子

供を持たず、仕事を続ける)、5) 非婚就業コース(結婚せず、仕事を一生続ける)の5つに分類した(手塚・古屋 2017: 71)。本研究は以上の分類を参考し、調査協力者のライフコースを1) 就業継続コース、2) 再就職コース、3) 専業主婦コースの三つのパターンに分けて、それぞれのライフコースの影響要因について分析していく。

(1) 就業継続コース

1) A さんの場合

中国人ネットワークの影響

A さんは修士課程を終了後、京都から北海道に行って夫と結婚して、そこで2年間暮らしていた。静かな田舎の風景が好きになり、「これからは北海道で暮らしていけるならいいなあ」とA さんは考えていた。北海道での2年間の暮らしは幸せだったが、時々当時東京にいた大学院時代の友人たちと交流した時に、仕事で一所懸命に頑張っている友人の姿を知り、「若いうちに、ちゃんとした仕事をやらないといけない」と思うようになった。東京の友達と相談して、東京に引っ越しして就職することを決めた。

A さん：うちの夫の仕事で、全部大学院時代の友人のおかげだったの。彼女の義理の父は無くなった、義理の母は自営した銭湯を閉めるか、他の信頼できる誰かに頼んで続けていくのか悩んでいたの。ちょうど、当時、彼女たち(A さんの院生時代の友人たち)に何度も東京に仕事を探してみようと誘われていた。夫も北海道で生まれ育ちだったから、東京で一人の知人もいなかった。大手企業での仕事を探せる訳でもなかった。そのきっかけで、二人は東京へ引越して、銭湯の仕事をやらせることにした。

このように、院生時代の友人の紹介で、A さんの夫が東京で銭湯の店で働くことにした。また、A さん自分自身も、もう一人の中国人の友人の紹介で大手企業に就職できたのである。

A さん：大学院は京都だったので、東京については何も知らなかった。ちょうどその時、大学時代の友達がX 会社(A さんの友達が働いていた会社)の人事課で働いていたので、会社は秘書を募集していると教えてくれた。その友達の紹介で、X 会社のポジションに応募した。その後、順調に採用された。不思議だと思わない? 中国の大学での友達と東京で同僚になったことなんて。縁があったからかもね。(笑)

また友人の紹介でA さんは東京の会社で正社員として働き始めた。一年間働いてから、正社員の仕事がつまらなくて、自由時間もないから、A さんは仕事を辞めたくなった。結局のところ、辞めなくて、バイトとして働き続けていた。A さんの話によると、もともとは仕事を辞めなかったのである。しかし、中国人の「女性は仕事をするべき」という意識の影響や、周りの同級生との比較の中で、辞められなくて、バイトとして働き続けている。

A さん：本当に仕事をするのが嫌だから、辞めたかったの。バイトも嫌だったから。でも、自分が中国で良い大学に進学したし、日本においても修士修了だったから、仕事をしないとなんか無断な感じ。そう思わない？中国人の意識の中では、良い学校から卒業したから、立派な仕事を従事しないと、失敗な人生になるみたい。周りの同級生みんな立派な社会人になっているし。うちの母にも許されないだろう。自分の中でもどうしても納得できない。だから、バイトだけ、どうしても就職を続けてるんだ。

A さんは普段に中国にいる友人と密接な関連を持ち、彼らを準拠集団としながら自分の東京での生活を調整していく姿が見える。また、これからのキャリア展望について聞かれた時、A さんは日中両国のネットワークを生かし、貿易に関する会社を成立しようと思っている。日本における中国人ネットワークだけでなく、トランスナショナルなネットワークも国際結婚女性の職業に影響を及ぼすと同時に、彼女らのライフコースにも影響を与えている。

#### 自己実現と夫の影響

A さんは結婚後、夫の収入が十分あるから、自分が仕事をしなくてもいいから、仕事をバイトに転換した。

A さん：私は他人に管理られることがたまらないタイプなの。正社員は毎日忙しくて、本当に疲れてたの。北海道での生活と全然違ってたし。また、夫の銭湯の仕事もどんどんよくなってきて、北海道での仕事よりもずいぶんお金が多くなったの。私はそれほど頑張らなくてもいいような気がした。そして、夫もこれ以上仕事での発展は見えなくて、っていうか、自営業だから、古いお店だし、昇進でも、大金を稼ぐみたいなことは全然なし。私も会社で昇進する気力も無くなったような気がした。別にバイトでちょっとだけ家計に力を入れてもいいから。やりたくなくなったら、夫と一緒に銭湯をやればいいじゃん。のんびりした生活でもできるし。

A さんは自由の生活が欲しくて、夫の収入の上昇で、バイトとして働いてもいいと考えるようになり、正社員からバイトに転換した。以上の A さんの話から見れば、夫の収入が高くなり、妻の就業する意欲が下げてきた。先行研究で検討したように、女性のライフコースは夫の所得階層に応じて異なり、高学歴女性の場合には、夫の収入の高さが妻の就業を抑制すること（中村 2010）や、自己実現や自己向上といった個人志向的な要因が転職行動に影響を与える（鈴木 1996）ということが A さんの話で検証された。また、A さんは修士課程を修了したという高学歴であっても、夫は「どうでもいい」、「普通の仕事」に従事しているから、自分も会社で一所懸命に昇進する気力もなくなったといったことから、妻の自己実現や自己向上といった個人的志向が夫の職業や収入階層によって影響されうるということも推測できるのではないだろうか。



## 2) H さんの場合

自己実現・トランスナショナルな仕事関係・夫の影響

結婚は人生のただ一つのイベントだけで、自分の楽しさは仕事からなのであると思った H さんは、結婚しても、化粧品系の大手企業の正社員の仕事を続けている。

H さん：私には一目惚れだったよ。夫が。(笑) 私たちの会社の事業会で。「自信的で魅力的だった」と言われたの。職場で輝いている女性は本当に魅力的だと私もそう思うよ。仕事は私の楽しみの源泉だよ。結婚しても、出産しても、辞めないつもり。

日本の伝統的なライフコースにこだわらなく、仕事が人生の重要なことと見なしてきている H さんだった。これからのつもりについて聞かれたら、「しばらくの間に、子供を産まない。二人ともまだ若いから、精一杯で仕事をして、好きなところに旅行に行って、好きな食べ物を食べて、人生を楽しむことが一番重要な」と語った。また、H さんの継続就業は夫からの支持を受けた。「仕事をする女性は輝いているんだと、よく夫に言われたの。もともとは自分が仕事の好きなタイプで、夫の支持ももらえたから、今までも一所懸命して仕事を頑張ってるんだ」と H さんは言っている。

H さんの夫は、会社での仕事が中国との貿易がだんだん多くなるにつれ、中国語を勉強するようになった。

H さん：普段は私が中国語を彼に教え、彼が興味深かったの。旅行とか、休み中にも中国に行ったり来たりすることによって、彼が中国についてもっと認識できるようになった。これはきっと彼の仕事にとって大事だと思うよ。私の仕事も中国人関係のことが多いので、よく中国に出張したりもするから、中国人としてはとてもやりやすい。時々も夫にアドバイスをあげる。(笑) だから、いつも夫がよく支持してくれた。自分も楽しんでいる。

(略)

H さん：よく自分の中国人の友達を夫に紹介する。夫は彼らと一緒に交流するうちに、いろいろ勉強になれるって。ここで国際結婚の利点が見えるかな、二つの国の人と友達になれる。

H さんと夫ともトランスナショナルな仕事関係のため、夫はよく中国人である H さんから仕事関係のアドバイスや助けをもらう。二人は助け合いながら、仕事を楽しんでいる。また、国際結婚によって、夫婦二人ともトランスナショナルなネットワークが拡大された。

(2) 再就職コース

1) B さんの場合

日本女性の伝統的なライフコース、夫の影響

B さんは中国の大学から卒業後、当時日本にいた親戚の紹介で日本に行って就職することになった。その職場で夫と出会う前に 10 年間ほど正社員として働いてきていた。夫と結婚してから、正社員の仕事を辞めて 2 年間暮らしていたが、2 年後にまたバイトとして働き始めた。再就業した時に、正社員ではなく、バイトとして働き始めたのは、夫の収入の影響を受けたからである。

B さん：結婚したら、仕事を辞めた。これから専業主婦として家にいるような生活を体験してみても大丈夫と思ったの。その時ね。なんか日本人女性はみんなそうじゃない。結婚したら、仕事をしなくなるみたいな。

B さん：二人の生活は一人よりも割りと簡単だったよ。夫一人での収入は十分だったし、義理の父と母も時々支援してくれた。子供もいないし。だから、正社員の仕事を辞めた。

(略) 2 匹の犬もいたし。彼らの世話をしないといけないし。そのまま 2 年間暮らしていた。(略) でも、夫一人の収入でしたら、自分の中にお金一つもない生活はやはり、なんというか、自由とは言えない。だから、バイトを始めた。毎月、何万円の収入もあって、自由に支配できたし。

筆者：ご主人の態度はどうでしたか。

B さん：彼は私の考えを尊重してくれた。いつもそうだ。私がやりたいことなら、やれば大丈夫みたいな。仕事してもしなくてもいい。

筆者：なるほど。

2) F さんの場合

伝統的なライフコース

F さん：介護士になりたかったのですが、ちゃんとした介護士の仕事を従事するか、日本の大学に行って介護学を勉強するかを悩んでいたが、結婚してからすぐ妊娠しちゃったの。就職も進学も全部できなくなったの。主婦になるしかない。みんなそうだから。

筆者：みんなそうだからって、どういうことですか？

F さん：主婦だよ。日本人女性はみんな仕事をやらないじゃない。結婚してから主婦になる。なんかすっごく自然なことみたい。

筆者：うんうん。なるほど。

Fさんが語った「みんなそうだから」というのは、日本における女性の伝統的なライフコースということである。結婚・出産を契機にして退職し、専業主婦になるということが「自然なこと」であるため、自分も同じようなライフコースを選んだのである。

また、Fさんは、第2子が保育園に行ったら、正社員として働き始めた。職種は事務職なので楽だったが、自分の望ましい職種である医療関係とはまったく無関係だったので、正社員だったが、その仕事に不満を持っていた。

Fさん：日本で進学したことがないから、日本で看護師になることはほとんど不可能だった。それがわかってる。悔しかったけどね。

筆者：どうしてですか。

Fさん：ほら、結婚してからすぐ妊娠しちゃったから、進学することは無理でしょう。医療関係の仕事はほとんどできなくなっちゃったの。特に看護師だね。

Fさんにとっては、自分の理想な職種に従事することができなくなったのは、結婚してからすぐに妊娠・出産したからである。また、出産してから退職し、専業主婦になった。これは自分が進学し続けることは無理になるということの意味している。

トランスナショナルなネットワークによって生じた葛藤

Fさんは、自分が再就業したのは中国におけるライフコースの影響を受けたからと言っている。また、周りの結婚・出産しても就職し続けている中国人の友人や中国にいる同級生などのネットワークと比較している中に、葛藤を感じている。

Fさんは、子供が大きくなったら、再就業することにしたが、上記した通り、好きな職種に従事することができなくて、自分が従事している事務関係の仕事に不満を持っている。周りの友人と比べてみると、悔しい気持ちを感じていたFさんの姿がうかがえる。

Fさん：日本で進学したことがないから、日本で看護師になることはほとんど不可能だった。それがわかってる。悔しかったけどね。

筆者：どうしてですか。

Fさん：ほら、結婚してからすぐ妊娠しちゃったから、進学することは無理でしょう。医療関係の仕事はほとんどできなくなっちゃったの。特に看護師だね。でも、周りの謝さんという女性がいるんじゃない。彼女は医療関係の仕事をずっとやってきている。羨ましいなと思ってた。中国で同じ大学だったのに、今現在彼女を私より立派になっている。(笑) 彼女は結婚しても仕事を続けているんだから。中国人はね、やはり仕事をやりたい女性が多いと思うよ。私は別にしょうがない。一旦仕事を辞めたら、再就職が難しくなったよ。看護の仕事が大変だから、その時の私にとってやるわけがないの。しょうがないよね。何年間の事務関係の仕事をやっちゃった。でも、二人の子供がいて、違う人生を送ってきて、

まあ、どちらかというと、十分満足したの。残念は残念だったけどね。仕事の面ではね、ちょっとだけ。(笑)

Fさんは、結婚する前に従事していた介護関係の仕事を従事し続けられなかったことに、時々周りの看護関係の仕事を従事している中国人と比較することによって悔しく感じた。

### 中国にいる親への介護による影響

Fさんが正社員を辞め、契約社員に転換したのは、親の介護の影響があった。50代前半になると、中国にいる母親の体が悪くなり、時々中国に帰って母親のお世話をしなければならなくなった。その契機にして、その当時従事している仕事をやめて、看護関係の契約社員として働き始めた。

Fさん：母が去年病気にかかって、私は仕事を辞めて中国に帰ったんだ。日本の仕事って、わかるでしょう。1ヶ月2ヶ月間みたいな長い休暇ができないじゃない。しょうがないよ。母の世話をしないわけにはいかないから、辞めるしかない。

Fさん：(その後) 介護関係の契約社員の仕事に転職した。契約社員はね、時間が自由だし。毎月いつかの介護の仕事があって、自分の時間に合わせて選択できるの。このようにして、時々中国に戻って親の介護をする余裕ができるようになった。またね、自分も年もとったから、毎日仕事をするのは大変だから、契約なら大丈夫。

### 3) Gさんの場合

#### 中国人ネットワークによる影響

Gさん：夫の両親とは別居なので、子供の世話をするのは私しか誰でも頼めないよ。中国にいれば、うちの母と父は子供の世話をやってくれるかもしれないけど。日本では無理。だから、出産したら、仕事を辞めた。子供が3歳になったら、またもう一度仕事を探すつもりだったの。

子供が3歳になったら、また就職するつもりだったGさんは、第一子が出産してから2年後に、第二子を産んだ。そのまま第一子の出産から第二子が3歳までの5年間は無職のままだった。

Gさんは、出産した後にすぐ仕事を探し始めたのは、周りの中国人友人の影響を受けたからである。

Gさん：子供が大きくなったら、中国人友人の不動産仲介会社で働き始めた。バイトだった。時間も自由だったし、会社環境も良かった。周りに中国人が多くて、普段の生活や育

児などのことについてもよく話し合えた。

しかし、バイトとして3年間働いたら、Gさんは正社員の仕事を探し始めた。

Gさん：バイトをやった3年間は楽しかったが、なんか自分の仕事の道はこれから終わるような気がした。そのままだと、人生が最後まで見えるんだ。自分もそろそろ40代になるし、仕事面では何も成績がなかった。恥ずかしいよ。特に周りの人たちと比べて。周りの友人はみんな家庭と事業と共に大成功を取れていた。時々飲み会に行った時、彼女たちと比べて、自分は前に進むどころか、後退していたような気がした。それは嫌だ。

筆者：だから、正社員になりたくなったんですか。

Gさん：そうです。まだまだ若かったし、今から始まるとまだ遅くないよ。夫もそういうふうに励ましてくれた。周りの友人の姿を見て、自分も自信を持つようになった。(笑)自分には仕事を従事する経験もあったし、能力もあると思うよ。だから、面接は順調だった。今の会社に雇われた。良かったと思うよ。

このように、出産を契機にして退職し、3年間バイトをやってきたGさんは、加齢と共に、周りの友人と比較しながら、自分の中に向上心があるようになり、正社員として働くことにした。

### (3) 専業主婦コース

#### 1) Cさんの場合

自己選択、夫側の影響

Cさんは結婚してから、仕事を辞め、専業主婦になった。

Cさん：専業主婦でも、引き続き仕事をやっても私にとっては別にどうでもいい。家にいて、ご飯を作ったり、テレビを見たりする生活も魅力的なのだ。私にとっては。あと仕事もちゃんとできるタイプだ。ただ、夫が稼いだお金は十分だし、義理の母によく女性は結婚したら主婦にならないとありえないって言われた(笑)。私に絶対主婦になさせるわけではないが、彼女は伝統的な日本人だから、女性は結婚したら仕事をするのはなぜだろうと彼女にとっては理解不能だから。

筆者：ご主人の態度は？

Cさん：彼に別に何も言われなかった。彼にとってはどうでもいい。(笑)

Cさんは専業主婦になることに対しては、Cさんの夫は中立的な態度を持ち、義理の母は賛成する意見を持っていたが、あくまでもCさん自分の選択であった。

### 中国にいる親による影響

C さんは夫の転勤により、東京から上海に引っ越した。その後に東京と上海の間に行ったり来たりする生活を送っていた。一応専業主婦であり、子供がいないため、毎日時間がたっぷりあった。C さんにとってはこのような生活が楽で楽しかったが、C さんの母親は異なる意見を持っていた。

C さん：「女性は仕事がしないと、男性に嫌われたよ。毎日家にいると、だんだん社会と離れていて、変になるよ。だから、早く仕事を探すのが一番だよ」と、よく母に言われたの。

(笑) 母はね、伝統的な中国人の意識を持っているの。女性は仕事もしないといけないとか、夫婦二人とも家を支えているみたいな考え方。なんか私はそのままだと、婚姻も潰れちゃうとか、彼女 (C さんの母親) は日本の状況を全然知らないからそう言ったの。でも私は説明しようとしたが、母は全然聞かない。

(略)

C さん：仕事がないと、普段の時間は親と一緒に旅行をしたりすることができた。親孝行だから、親も楽しかった。でも、旅行が終わったら、またいつも仕事探し始まるのかと、母に聞かれるようになった。(笑)

結婚し、退職して専業主婦を楽しんでいる C さんは、伝統的な中国人女性の意識を持っている C さんの母親の影響を受け、葛藤を感じた。「日本にいた時は、彼女 (C さんの母親) の話は左耳から入って、右耳から出ても大丈夫だったが、中国に住んでいる時、母はよくそういう話をして、しょうがないよね。これからは元々の会社に入ってバイトとかしようかなと時々思っ」と C さんはこのように無職なままに続けていくか、母親のアドバイスを聞いて、新しい仕事を探していくかを悩んでいる。しかし、専業主婦として、時間が十分あるため、C さんは両親と一緒に旅行をすることによって親孝行ができるようになった。

### 2) D さんの場合

D さんは前の夫 (中国人) と離婚して、現在の夫と結婚したのである。結婚したら、来日して、専業主婦になった。

D さん：元々は中国にいたとき、医療関係の仕事をやっていたの。でも、結婚したら、日本に来て、再就職するつもりはなくなった。日本だから、結婚したら、別に仕事をしなくても大丈夫な気がした。普段の時間が自由だし、自分が好きなことをやってもいいし。

D さんは、結婚後に退職することが「自然で」、「当たり前のこと」だと考えている。D さんは、現在の夫との間に子供がいないため、「専業主婦の仕事はそんなに難しくないから、いつでも再就業しても構わない」と思ったが、以下の「親の介護」の影響で、再就業できなかった。

#### トランスナショナルな親子関係による影響

Dさんは一人っ子であり、お父さんも70歳になったので、近年体が悪くなり、Dさんはお父さんの介護を行うために、中国と日本の間に行ったり来たりして生活しなければならなくなったのである。そのため、就職することは無理になった。

Dさん：うち父は体が良くないので、ちょうど私が仕事をしないから、月二回に上海に戻る。上海と東京は近いし、便も多いから、すごく便利だ。今の段階で時間もたっぷりあるから、できるだけよく帰って両親の世話をしてあげたいの。(略)父の関係で、そんなに頻繁に帰国するんでしたら、どの仕事でも無理でしょう。(笑)だから、再就職しなかったの。このままでもいいよ。両親は年配になったから。

このように、月二回上海に戻って親の介護をするため、調査時点では、Dさんは無職なままだった。

#### 3) Eさんの場合

##### 日本の伝統的な男女役割意識の影響

Eさんは退職した理由については、以下のように語った。

Eさん：別に理由とかではなくて、自然なことだから。日本は国内とは異なり、女性が結婚したらみんな退職するんじゃない。赤ちゃんを保育園に行かせるまで彼女の世話をするから。これは普通のことだから。

Eさんは、上述したFさんと同じように、結婚したら退職することが日本においては「自然なこと」であると思っている。子供が保育園に行ったら、また再就業するつもりがあるかどうか聞かれたら、「どっちでもいいと思うよ。まだ考えてなくて、そのときの状況を見てまた決める」と答えてくれた。

## 5. 考察

本稿の調査協力者のライフコースは三つのパターンに大別しうる。すなわち、就業継続パターン、再就職パターン、専業主婦パターンである。ライフコースの影響要因としては、高学歴外国人人材、中国人ネットワークといった人的資本、夫の情緒的サポートや経済的サポート、準拠集団との比較から生じた刺激、中国の「女性は結婚・出産しても仕事をすべきだ」という意識を持つ母親の期待、日本社会における伝統的なライフコース意識に影響、親の介護の影響、自己実現の需要などがある。以下はトランスナショナリズムの視点から深く考察していきたい。

まずは、夫の中国への転職や中国における親の介護のために、国際結婚した女性は仕事を辞め、中国に戻さなければならない状況にある女性たちの姿がうかがえる。それは以前の単一なライフコースの経路とは異なり、「トランスナショナル化したライフコース」である。国際結婚移住におけるトランスナショナリズムは直接的に女性のライフコースに影響を与えることもあれば、女性の就業に影響を与えることもある。また、国際結婚移住した女性は、中国にいる同級生や友人などを準拠集団とすることが、職業やライフコース選択に影響を及ぼす。そして、「立派な仕事に従事してほしい」という母親像を期待されることによる葛藤も生じている。彼女たちは二つの国で生活した経験があり、二つの文化を身につけ、加齢するとともに、葛藤を経験しながら、ライフコースを選択している姿がうかがえる。

今日の社会移動、特に国際結婚移民を深く理解するには複数の国にまたがるネットワークに目を向ける必要性があり、出身地と移住先を行き来するにとどまらず、双方の文化や習慣、社会関係が国境を越えて浸透することも含めて考える (Levitt 2001) 必要性もある。トランスナショナルな親子関係やネットワークが国際結婚した女性のライフコースに影響を与える一方、異なるライフコース選択や職業キャリア選択により、トランスナショナルなネットワークが拡大され、親子関係が再構築されることができる。そこで、トランスナショナリズムが再編される可能性が推測できるだろう。

ライフコースの多様化は様々な社会制度や社会構造の影響を受けた結果である。一方、トランスナショナル化した国際結婚移住女性の状況を考えると、そういった多様な生き方により、社会構造もまた変化することが予測される。たとえば、労働力不足の日本社会においては、本稿の研究対象者のような高学歴人材を生かすための対応策として、会社の制度や構造も変化を受け入れざるを得ないだろう。本稿で分析したライフコースのパターンと影響要因という結果からの政策的なインプリケーションとして、国際結婚した女性、特に本稿の対象者であるそれらの高学歴人材を生かし社会に貢献させるために、結婚・出産しても、就業し続けやすい職場制度や環境の整備や、結婚・出産のため一旦仕事を辞めても、彼女らの復職や再就業を手助けするファミリーフレンドリーな制度や環境の整備が必要ではなかろうか。また、本稿の分析からわかるように、結婚後も子どもを産むことなく、自発的に非正規雇用形態を望む A さんのような人もまた存在している。当然、そのような生き方をサポートする方法を制度的に考えなければならなくなる。その際、中国出身者同士の人的中国人ネットワークが有効に活かせると考えられる。

今後は、年齢層・社会階層など、より幅広く、多様な事例の収集と分析が課題である。また、ライフコースだけではなく、彼女らの家庭生活や日本社会におけるネットワークを詳しく究明するのも今後の課題としたい。



【文献】

日本語文献

- 南貴子, 2018, 「代理懐胎の法制度のもとで浮かび上がってきた課題——オーストラリアの事例分析をもとに」『社会保障研究』2(4): 578-90.
- 辺静, 2006, 「中国中年期女性の職業キャリアと家族キャリア」『人間文化論叢』9: 377-387.
- 平尾桂子, 2005, 「女性の学歴と再就職」『家族社会学研究』17(1): 34-43.
- 伊藤るり, 足立真理子, 2008, 『国際移動とく連鎖するジェンダー——再生産領域のグローバル化』 作品社.
- 上杉富之, 2004, 「人類学から見たトランスナショナリズムの研究—研究の成立と展開及び転換」, 『日本常民文化紀要』24: 126-184.
- 川口章, 2002, 「ダグラス＝有澤法則は有効なのか」『日本労働研究雑誌』501: 18-21.
- , 2005, 「結婚と出産は男女の賃金にどのような影響を及ぼしているのか」『日本労働研究雑誌』532: 42-55.
- 李賢郁, 2008, 「ライフコースからみた1960年以降の韓国女性の初就業時移動」『経済地理学年報』54: 19-39.
- 李善姫, 2012, 「グローバル化時代の仲介型結婚移民～東北農村の結婚移民女性たちにおけるトランスナショナル・アイデンティティ」 大西仁・吉原直樹監修 『移動の時代を生きる—人・権力・コミュニティ』 東信堂, pp3-41.
- 宮島美花, 2015, 「移動を説明する諸理論と、中国朝鮮族の移動・生活—日本在住の朝鮮族の事例から—」, 『香川大学経済論叢』87(3,4), 185-216.
- 泰山亮太, 2016, 「結婚は職業キャリアにいかなる影響を与えるのか?—無業・管理職への移動に関する男女比較分析—」『家族社会学研究』28(2): 122-135.
- 村上あかね, 2000, 「女性の就業とライフコース: 専門職女性を対象に」『年報人間科学』21: 207-224.
- 中井美樹, 2009, 「就業機会、職場権限へのアクセスとジェンダー—ライフコースパースペクティブによる職業キャリアの分析—」『社会学評論』59(4): 699-715.
- 中村三緒子, 2010, 「大卒女性のライフコースを分ける要因に関する研究」『現代女性とキャリア: 日本女子大学現代女性キャリア研究所紀要』2: 66-81.
- 落合恵美子, 山根眞理, 宮坂靖子, 2007, 『アジアの家族とジェンダー』 勁草書房.
- 大野恵理, 2015, 「結婚移住女性を対象とした現地事前教育におけるジェンダーとライフコース: ベトナムにおける「結婚移民者のための韓国文化教室」から」『常磐台人間文化論叢』1: 49-68.
- 嶋崎尚子, 2008, 「社会学のポテンシャル2」『ライフコースの社会学』, 学文社.
- 鈴木淳子, 1996, 「若年女性のキャリア選択規定要因に関する縦断的研究—同一組織における就労継続および転職—」『心理学研究』67: 118-126.
- 武田里子, 2011, 『ムラの国際結婚再考—結婚移住女性と農村の社会変容』 めこん.
- 手塚紀子・古屋健, 2017, 「女子大学生のライフコース選択に及ぼす家族の影響についての研究」『立正大学心理学研究年報』8, 71-88.

柳蓮淑, 2013, 『韓国人女性の国際移動とジェンダー—グローバル化時代を生き抜く戦力』明石書店.

山本須美子, 2017, 「在日インド人家族の学校選択を通して見たトランスナショナリズム」, 『アジア文化研究所研究年報』51, 271-289.

英語文献

Elder, Glen H., Jr. 1985, “Perspectives on the Life Course.” In Glen H. Elder, Jr., ed., *Life Course Dynamics: Trajectories and Transitions, 1968-1980*, pp. 23-49. Cornell University Press.

Levitt, Peggy, 2001, *The Transnational Villagers*, University of California Press.

Mayer, K. U., 2001, “The Paradox of Global Social Change and National Path Dependencies: Life Course Patterns in Advanced Societies,” A. Woodward and M. Kohli eds, *Inclusions and Exclusions in European Societies*, London: Routledge.

中国語文献

蒋永萍, 2001, 「世紀之交關於『段階就業』『婦女回家』的大討論」『婦女研究論叢』39: 23-28.

(かく しょうらい 慶應義塾大学大学院社会学研究科)